

更級日記研究

著者	伊藤 守幸
号	111
発行年	1995
URL	http://hdl.handle.net/10097/14376

い とう もり ゆき
伊 藤 守 幸

学位の種類 博士(文学)
学位記番号 文 第 111 号
学位授与年月日 平成7年12月21日
学位授与の要件 学位規則第4条第2項該当

学位論文題目 更級日記研究
論文審査委員 (主査)

教授 鈴木 則 郎 教授 佐々木 昭 夫
教授 加 藤 正 信
教授 仁 平 道 明

論文内容の要旨

『更級日記』は、表面の平明な装いとは裏腹に、多様な問題を内包する作品である。たとえばこの作品を分析的に読み進めるとき、その構造が決して単純なものではないことが知られるはずであるし、表現内容に関して言えば、字句の意味それ自体の明快さにもかかわらず、作中における存在理由を説明することが困難な表現も頻出するのである。さらに、『更級日記』の表現や記事構成の仕方が、しばしば先行諸作品の影響を覗かせている点なども、『日記』本文の意味を重層化するための方法と見なすべきであり、その結果、単純には読み解けない複雑な性格が作品に付与されるのである。

本論文は、そのような『更級日記』を対象として、多様な側面から総合的作品研究を試みたものである。目次にも記したように、本論文は、第一部「『更級日記』の構造」、第二部「『更級日記』の表現と方法」、第三部「『更級日記』と『源氏物語』」という三部から成るが、こうした論文構成の仕方も、多元的な視点から作品の全体象に迫るために採用されたものである。以下、目次に従いながら、論文の概要を記す。

第一部 『更級日記』の構造

第一部では、『更級日記』の構成上の基本的枠組みの問題や、家集的章段偏在の実態を検証しつつ、この作品の有する構造的多層性の意味を考究する。

序章『『更級日記』を読むとはどういうことか』は、論文全体の導入部的な意味を有する一章であり、『更級日記』の成立、及び流布の事情や、近代以降の研究史に関する整理が試みられている。

『更級日記』の本格的な研究は、藤原定家自筆写本の錯簡が、玉井幸助『更級日記錯簡考』（大正14）によって正され、本来の『更級日記』の姿が復元された時点から始まると言ってよい。その後、昭和の初頭から十年代にかけて、復元された『更級日記』に基づく作品研究が陸続と発表されているが、戦前の『更級日記』研究の特色として指摘できるのは、作品総体の読解を通じて作者の精神に迫ろうとする包括的な議論の多いことと、そのようにして提出された孝標女像が、論者に応じて異なった（場合によっては対蹠的な）像を結んでいることである。『更級日記』は、錯簡の訂正によって初めてその本来の姿が明らかにされたときから、すでにして多様な相貌を有する作品として立ち現われていたのである。序章においては、昭和初頭から四十年代までの代表的な議論のいくつかを紹介することによって『更級日記』の研究史を概観し、あわせてこの作品の多様な相貌についても確認した。さらに本章では、『更級日記』の執筆時期の問題や定家自筆写本の成立事情に関しても考究し、定家本『更級日記』の奥書に「先年伝得此草子」と記されている「草子」こそ『更級日記』の「原本か、もしくは原本に近い写し」であり、『新古今集』の撰進以前に、定家はおそらく『浜松中納言物語』等、孝標女作とされる他の物語類ともどもこの『日記』を求め読んだのであろうという仮説を提示した。定家自作の物語である『松浦宮物語』と『浜松中納言物語』との影響関係を基にした仮説である。

続いて第一章「幻想と現実」では、まず日記研究の大前提とも言うべき基本的事実が確認されている。すなわち、あらゆる自伝は「私はこのように生きた」という簡明な記述の具体的展開にすぎないわけだが、自伝に関する研究は、この記述を括弧に括り込み（「私は『私はこのように生きた』と書く」）、回想意識（執筆意識）のありように留意しなければならないのである。その点を確認した上で、本章の考察は、記事内容に即した形で進められることになる。具体的な作品分析の開始にあたって、『更級日記』の内容をある程度全体的に把握しておくためである。その際、本章で、『更級日記』において幻想と現実の関係がどのように描かれているかという観点からの考察が試みられる。

『更級日記』の主題論にとって「幻滅」の問題が重要な課題であることは、従来の研究史に照らしても明らかである。ただ、『更級日記』に幻滅の主題を読み取る従来論の多くは、幻想に対して一面的に否定的な価値づけを行なっているのだが、本章では、幻想に有する両面価値的性格を重視し、幻想と現実を対立概念としてではなく、むしろ対をなす概念と捉える立場から、新たな分析を試みている。そうした観点から、たとえば少女期の『源氏物語』との出会いの前後の事情を描いた記事なども、物語と現実との相互に相対的な関係を巧みに描き出したものとして捉え直されることになる。また、一般には三十代半ばの結婚前後の記事を境にして内容的変化が問題にされることの多い後半生の記事群にしても、後半生の記事から「家の女」としての日常的現実が排除されていることに着目するとき、幻想と現実の関係構想という点では、基本的に一貫した姿勢を示していることが明らかになる。すなわち、『更級日記』の構造的特質を全体的なものとして示そうとするならば、幻想と現実とが相互に相対化し合う、合わせ鏡的構造こそが最もふさわしいのである。

第二章「家集的章段と散文的章段」は、作中に偏在する諸謂家集的章段が、『更級日記』にとってどのような意味を有するのかという問題を中心に、具体的な検証を試みている。

日本古典全書『更級日記』の本文区分に従えば、都合八十段という『更級日記』の全章段のうち、歌を含む章段は四十八段、含まない章段は三十二段である。歌を含む章段のすべてを家集的章段と見なすわけにはゆかないので、記事内容に即した具体的検証を行ない、その結果、家集的と呼ぶに値する章段は二十七章段ということになる。引き続きそれらの章段について、より詳細な検討を加え、従来「自叙の構成に積極的な意味を持たせない」と見なされることの多かった家集的章段も、その大部分が章段相互の間に何らかの有機的関連を有しているという結論を得た。なお、こうした考察によっても存在理由の明らかにならない章段が二つ残されるが、面白いことにそれら二つの章段は、ともに「尼」に歌を贈るという、酷似した内容を有するのである。しかも、そのような唐突な尼の登場は、作品の終末部でも繰り返されており、これらの章段からは、作品の深層部分における連繋が読み取られるのである。なお、本章では、作品末尾の歌に関する近年の議論に関連して、この歌の詠歌主体を確定するためには、なおいくつかの疑問点が残されていることを指摘した。

第三章「東山の記の解釈をめぐる」は前章の問題意識を継承する形で、典型的な家集的章段である東山の記を素材として、家集的章段と散文的章段との関係について具体的に検証した。

東山の記は、半年ほどの東山滞在記とその後日譚の挿話から成り、作者十八歳から十九歳にかけての記事と想定されている。それは作品全体の記事量に照らしてかなり長大な記事であるが、その存在理由についてはこれまでのところ余り説得的な議論は存在しなかった。本論文は、その理由について、東山の記の直後に置かれた「あらましごと」に関する記事との関係に注目することによって説明を試みている。すなわち、「浮舟の女君のやうに山里に隠し据ゑられて、花紅葉月雪をながめて……」という少女期の夢想は、単に漠たる空想にとどまるものではなく、東山の記を仔細に読み解くとき、その半年間の山里暮らしは、あたかも「あらましごと」の想像的実践の場であるかのように描かれていることが知られるのである。本章では、そのように散文章段との関係に着目することによって、東山の記の存在理由を明らかにするとともに、他説に対する批判的検討をも踏まえながら、家集的章段の典型とも目される東山の記が、それ自体をすぐれて構成的に作り上げられたものであることを明らかにした。

第四章「作品の構造的多層性について」は、第一部のまとめとして問題点の整理を試みている。本章では、まず「よしなき物語歌」という文芸に対する否定的思いをこめて記された文章が、それ自身すぐれた作品として成立してしまうという皮肉な事態において、『更級日記』は文芸が本質的に免れることのできない根源的パラドックスを体現しているという点が検証される。続いて、「遊女」や「仏像（及び仏のイメージ）」が登場する記事群を検討することによって、第二章で「尼」の記事に関して確かめたのと同様の、深層構造における章段相互の連繋を確認した。そうした検討を通じて言えることは、『更級日記』は、時系列に従って羅列された雑纂の記事群を、悔恨の意識を基調とする述懐だけがかろうじてつなぎ止めているといった、単純に平面的な構造の作品ではなく、様々な図柄が重ね合わされた、多層的構造体として理解されるべき作品だということである。

第二部 『更級日記』の表現と方法

第二部では、『更級日記』の表現や記事内容上の顕著な特質、さらには作品を支える方法意識の問題等をめぐって、様々な角度から具体的な作品分析が試みられている。

第一章「三筋の葵・四本の柱——数量的厳密さをめぐって」は、瑣末で具体的な数量表現が『更

級日記』に頻出することの意味について考察する。たとえば、「葵のただ三筋ばかりあるを「野中に、丘だちたるところに、ただ、木ぞ三つ立てる」、あるいは「大きな柱、川の中に四つ立てり」といった表現に関して、従来、「どういふ必要があるのか、よくわからない表現」であるという指摘がなされている。本章では、右に引いた風景描写の表現に限らず、仏像や鏡の大きさに関する表現なども含めて、頻出する数量表現は、読者にとっては瑣末な細部に関する事柄にすぎないとしても、失われた過去の時間を自伝作品の執筆によって再構築しようと試みている作者にとっては、体験的事実の客観的具體性にかかわる事柄だけに、決して揺るがせにできなかったのではないかという観点を提示してみた。そうした見方を裏付けるため、経験的実感に対する孝標女のこだわりがどのようなものであったかを、関寺の「丈六の仏」に関する記述を検証することによって確認した。すなわち、『更級日記』には「丈六の仏」として登場するこの仏像は、『関寺縁起』には「五丈」の弥勒仏として記録されているのである。この差異が孝標女の記憶違いによるものでないことは、『弥勒画像集』に「関寺五丈弥勒像周五丈也」という記述が認められることから明らかである。この弥勒像の五丈という法量は、周尺を用いることによって水増しされた数字であり、「居丈」で二丈というのが、この仏像の実際の大きさだったのである。そうした事実を踏まえるとき、「居丈」二丈の仏を五丈仏として記憶するのはむしろ不自然であり、『更級日記』の表現は、孝標女の経験的実感を伝えるものと捉えられるのである。

第二章「子どものまなざし」では、作中に子どもの視点を内包している点に『更級日記』の表現上の特質を認め、その意味について考察を試みた。ここでは、まず子どもに関する近年の研究成果を押さえた上で、当代の他の物語や日記にも留意しながら、平安朝における人間の成長段階の区分の仕方について検証した。その結果、孝標女の特異な晩婚の意味が改めて浮き彫りにされ、結婚観の問題も含めて孝標女の『源氏物語』理解の実相についても再考の必要のあることが確認された。さらに、一貫して十三歳の少女の視点から書き進められている点に特異性の認められる東海道上洛の記に関しては、『土佐日記』に記された子どもの歌などとも対比しながらその表現構造に検討を加え、前章で問題にした「野中に、丘だちたる所に、ただ、木ぞ三つ立てる」といった無償の表現が、認識の枠組みが形成される以前の子どものまなざしによってこそ可能であった所以が明らかにされる。なお、こうした『更級日記』の表現と同質の子どものまなざしは、『源氏物語』真木柱巻にも見いだすことが可能であり、孝標女が『源氏物語』によって自己形成を果たしたことの意味についても再考の必要がある。

第三章「多元的視点について」は、作品に内在する作者の視点の多元性について分析する。最初に取り上げるのは、初瀬に代参した僧侶の語る夢の話である。作者二十代半ばの記事であるが、作者の母は、僧侶に初瀬への代参を依頼し、娘の将来を占わせる。その際、彼女は鏡を鑄造させて持たせている。帰参した僧は初瀬で得た夢告について語るが、それは、持参した鏡に明暗二相の影が映し出されるというものだった。この夢語りについては、作り話ではないかという可能性も取り沙汰されているが、問題は話の真偽ではなく、なぜこのときこの夢の話が作者の心に深く刻まれたのかということである。結論のみ記せば、夢の化紙の明快な二項対立的図柄は、当時の作者の精神状況をも象徴的な形で映し出していると考えられるのである。期待と不安の間を揺れ動きながら、己の来し方行く末について見つめつつ内省の時間を重ねていたのがこの時期の作者であり、そんな彼女の様々な思いめぐらしに対して、僧の語る鏡の夢は、極端に単純化されたひとつの形を与えるこ

とになったのである。そして、夢の鏡が提示する二項対立的図柄の象徴性は、単に二十代の作者にとって意味深いばかりではなく、『更級日記』という作品の総体ともかかわるものである。本章では、作品の本質的部分にかかわる二項対立的要素として、「あづま」と「みやこ」、「光」と「闇」という二組の対立項を抽出して検討を重ね、作者の視点の多元性を明らかにしている。

第四章「方法としての夢」は、作中に頻出する夢の記事を取り上げ、それらの記事がどのように作品全体の構成とかかわり、方法的に利用されているかという点について検証する。『更級日記』の夢の記事について考える際には、夢の内容そのものと、夢に対する作者の態度の両面に留意しなければならない。夢の内容に関して注目されるのは、十代と二十代の夢に、文芸意識と宗教意識の葛藤が、きわめてあからさまな形で表出されている点である。後半生の記事には、その種の夢は見いだされなくなるが、この変化は夢に対する作者の態度の変化とも相即しており、作品の構成を整える上で、これらの記事が意図的、方法的に利用されている様子が窺われる。また、夢の記事の中には天照御神にかかわるものもあるが、天照御神信仰は宮仕え願望と結びつけられる形で語られており、夢の記事も含めて作中四箇所にわたって登場する天照御神関連の記事を通読するとき、時系列と即応する記事内容の変遷によって、宮廷生活に対する作者の願望が次第に具体的なものとして育まれてゆく過程が浮かび上がるとともに、そうした願望と現実の宮仕え経験との間に存在した溝の深さまでが浮き彫りにされるのである。これなども、夢の方法的利用の一事例である。

第五章「不在の〈他者〉」は、『更級日記』から読み取られる作者と作品の特質な「孤独」のありようについて検証する。武蔵と下総の境を流れる隅田川について、『更級日記』は、「武蔵と相模との中にゐて、あすだ川といふ、……中將の集には隅田川とあり」という奇妙な記述の仕方をしている。川の位置と呼称の二点が問題となるが、「あすだ川」という呼称は隅田川の異称として理解されるし、川の位置の錯誤については意図的な事実違反として解釈する可能性も探られている。ただし、そのような読解の仕方は分析的なものであり、仮に右の記述が構成的配慮のもとに書かれているのだとした場合、その構成意識は、対読者意識という側面において奇妙な欠落をも示すことになるのである。そして、そうした表現のありようこそ、『更級日記』から看取される特異な「孤独」のありようと象徴的な形で響き合うのである。たとえば『更級日記』の冒頭部は、物語からの疎外状況を描きながら作品世界を始動させているが、物語との出会いを夢みて薬師仏に祈る作者は、その際、「人まにみそかに」行動しているのである。また、姉や継母、父や兄といった身近な人々の姿が、長大な上洛の記を通じてほとんど描かれることがないのも奇妙な話である。上洛後の記事について言えば、夫橘俊通の姿が消去されていることなども、同様の事態と言えよう。そして、作品は、そうした他者の不在によって生じた空白を埋めるかのように、多くの物語作者や歌人、さらには物語の作中人物達を、しばしば作中に請じ入れるのである。このような『更級日記』の特異なありようにとって、象徴的な意味を持つと思われるのが、足柄山での遊女達との遭遇を描いた場面である。都人にとっては、最も縁遠い「他者」であるはずの遊女との出会いについて、孝標女が異様な迫真生にみちた文章を記し得たのは、他ならぬ彼女自身、孤独な旅人としての自覚を有していたからである。足柄山の記事を書き進める孝標女は、遊女達の姿を通じて、外部世界から去来する他者の姿というよりも、むしろ「内なる他者」とでも呼ぶべき者の姿こそ描き出してしまったのである。

第六章「旅の記としての性格をめぐる」は、『更級日記』の顕著な特色を形づくる紀行文頻出

の実態や、そのことが作品にとって持つ意味について、他の日記作品とも比較しながら検討しながら検討する。紀行文的要素を持った記事を数え上げると、『更級日記』のほぼ半分が、そうした記事によって占められていることが知られる。これは他の同時代の日記に比して『更級日記』の特異性を際立たせる事実である（旅日記として書かれた『土佐日記』は除いて）。本章では、『更級日記』と『蜻蛉日記』の石山詣で記事を比較検討しながら、両者それぞれの紀行文としての特質を明らかにする。こと物語で記事に関して言えば、『蜻蛉日記』は『更級日記』以上に多くの記事を内包しており、道綱母の方が孝標女よりも頻繁に物語でを繰り返していたことが知られるのだが、両作品の読者の印象は異なるはずである。実際の物語での頻度とは裏腹に、道綱母が典型的な「家の女」として「家」に束縛されている印象が強いのは、『蜻蛉日記』においては、物語での有様もさることながら、そこに至るまでの経緯が委曲を尽くして描かれているからであり、それに対して、孝標女が旅ばかり繰り返しているような印象を与えるのは、『更級日記』が「家の女」としての日常については徹底して沈黙を貫き、その空白を埋めるかのように、一連の物語で記事を集中的に配列しているからである。さらに本章では、作中の和泉紀行と『源氏物語』との影響関係についても検証し、孝標女にとって、紀行文の執筆は、現実の旅の再現というばかりではなく、言葉の世界を旅することでもあったという点を明らかにする。

第三部 『更級日記』と『源氏物語』

第三部では、『源氏物語』をはじめとする先行諸作品と『更級日記』との関係が、具体的に考察される。

第一章「日記と物語の関係をめぐって」は、まず『蜻蛉日記』と『更級日記』の冒頭部分を対比しながら、等しく物語への屈折したこだわりを示す両作品も、そのこだわりの内実には相当の差異が認められることが検証される。『蜻蛉日記』の場合、「古物語」の「そらごと」は、「身の上」のことを記す日記に対立するものとして専ら否定的に触れられるのみだが、『更級日記』の場合、「よしなき物語」という思いは常に二律背反的なものとして描かれるのである。そして、この差異からは、『蜻蛉日記』と『更級日記』の間に位置する『源氏物語』の意味の大きさも、改めて浮き彫りにされるのである。引き続き『紫式部日記』と『更級日記』の関係を取り上げ、孝標女が『紫式部日記』を目にしていたことを、いくつかの状況証拠をもとに確認する。その上で「宇治の渡り」の段を取り上げ、この場面の正確な読解のためには、孝標女の『源氏物語』理解に関する緻密な検証作業が欠かせない所以を明らかにする。なお、本稿では、再度の初瀬詣で記事と平等院との関係についても考究を試みた。すなわち、再度の初瀬詣では永承の末年（乃至は天喜の初年）当時のことと推断され、それは平等院の完成と前後する時期でもあるのだが、『更級日記』はその点について何も触れていない。これは、中年期の一連の物語だが、専ら現世利益の思いに支えられるものとして書きなされていることと即応するものであり、この世の浄土としての平等院については触れず、『源氏物語』の舞台としての宇治について語る作者の姿勢からは、彼女の物語に対するこだわりが、『日記』執筆時においてなお深いものであることが知られるのである。

第二章「姉・継母と物語」は、作者を物語世界へいざなう媒介者としての役割を果たした姉、継母の意味について考究する。まず継母は、上洛の直接孝標と離別することになり作者のもとを離れている。宮仕え後の結婚が幻滅に終わるという継母の経験は、孝標女自身のその後の体験と酷似し

ている点が興味深い。継母の存在は、孝標女にとって人生の良き先達として仰ぎ見られていたに違いないが、離別の場面に置かれた贈答歌からは、継母が孝標女の性癖や物語への耽溺ぶりをよく理解していたことが知られるのである。次に姉の存在であるが、この姉は、亡き侍従を捜し求めたりするなど、孝標女との深い精神的同質性を感じさせる存在である。そして、姉の夭折前後の出来事をめぐる『更級日記』の記事構成は、姉の人生が死後もなお物語とのかかわりを示していたという事実の象徴性を際立たせるものとなっており、そうした書き方によって、孝標女は、姉と物語とのかかわりの深さを改めて確認しているのである。

第三章「物語を読む女たち」は、『源氏物語』読者としての孝標女に、『源氏物語』の中に登場する「物語を読む女たち」の姿は、どのように映じていたのかという問題意識に基づき、蓬生巻の末摘花を中心に考究した。早熟な文学少女の孝標女と「心遅き」末摘花の間には共通点などなさそうにも思われるが、実際には、蓬生巻には末摘花の住む故常陸宮邸の購入を画策する「受領ども」の姿が点綴されるなど、孝標女が身近に感情移入できそうな場面も存在するのである。本稿では、孝標の自邸購入の経緯について、歴史研究の成果も踏まえながら考察してみた。さらに『源氏物語』の中には、末摘花が『唐守』という物語を読む場面が出てくるが、『唐守』は末摘花物語の構想の原拠とも目される物語であり、そんな物語を末摘花に読ませる辺りには紫式部の皮肉な視線が看取されるが、同様のまなざしは、自分の器量を棚に上げて夕顔や浮舟に憧れる少女の姿を描く『更級日記』からも読み取られるのである。『唐守』を読む末摘花を描いた『源氏物語』を読む孝標女を描いた『更級日記』——この相似的二重構造の意味は、孝標女にはっきりと自覚されていたはずである。また、『紫式部日記』に描かれた式部の日常と蓬生巻の末摘花のそれとが酷似している点にまで思いを及ぼすならば、『更級日記』に対する『源氏物語』の影響は、単に都合よく物語の一節を利用するといった次元の問題ではなく、より本質的に、孝標女は、物語の作中人物のイメージを利用しながら自嘲的に自画像を描く方法をこそ、紫式部から学び取っていたのだという読みが可能となるのである。

第四章『更級日記』と『源氏物語』は、表題の通り二作品の影響関係について考察する。最初に取り上げるのは、乳母の死の場面である。この場面には『源氏物語』薄雲巻の影響が認められるが、この影響関係が興味深いのは、乳母の死が、作者が『源氏物語』と出会う以前の出来事だという点である。しかもこの場面が、近親者の死に接して「物語のゆかしさもおぼえ」なくなったという事情について語っていることを考え合わせれば、そうした記述にまで『源氏物語』の影がさすという事態のあやにくさは、孝標女にとって『源氏物語』が如何に自身の血肉と化していたかということを、何よりも雄弁に物語るものである。続いて「あらましごと」の記事と宇治十帖との関係が問題にされる。「あらましごと」の中の「光源氏などのやうにおはせむ人を、年に一たびにても通はしたてまつりて」という一節は、中將の君（浮舟の母）が、匂宮と薫に対して懐いた感想と重なるものである。ともに理想的な男性像に幻惑される心理を描いている点で、孝標女の文章は中將の君の言葉とみごとに照応しており、このような的確な引用の仕方は、孝標女の『源氏物語』理解の水準について考える上で有効な手掛かりになると思われる。

最後に、孝標女と姉が『長恨歌の物語』と『かばねたづねる宮』を求めたことの意味について考える。『源氏物語』と「長恨歌」の関係は周知の事柄だが、散佚物語『かばねたづねる宮』もその概要は知られており、この物語の枠組みは浮舟物語と酷似しているのである。すなわち、『源氏物

語』の熱心な読者が、『源氏物語』耽読後、『長恨歌の物語』や『かばねたづねる宮』を求めているという事実は、この姉妹の読書遍歴が、理に適う一貫性を有するものだったことを示している。孝標女は、『更級日記』の中で文学的知識をあからさまな形で開陳したりはしないが、こうした読書遍歴なども、彼女の『源氏物語』理解の実相を探る上で貴重な手掛かりを与えてくれるのである。なお、『更級日記』に一貫して認められる孝標女の謙抑的姿勢もまた、彼女が生涯を通じて『源氏物語』と紫式部を意識し続けていたことと無縁ではないはずである。天才的作品に遭遇した凡庸さの辿る運命を描くという、凡庸ならざる発想によって、『源氏物語』読者としての孝標女は、文芸史上に永く特権的な地位を保つことになったのである。

論文審査結果の要旨

本論文は、平安女流日記としての『更級日記』の文芸的世界の特質と諸相を、構造・表現と方法・『源氏物語』を中心とする先行文芸との関係等の視点から多角的、総合的に究明しようとしたものである。

平明な文体で書かれた『更級日記』は、作者菅原孝標女が自らの生を過去のある時点から現在に向かって直線的にたどりなおした単純な構造の作品であるかのように見えるが、その文芸的世界は過去の出来事の現在における思考・感情と日記執筆時点の感懐とが錯綜する複雑な表現によって再構築されたものであり、単一の視点によって統合することを拒否する多様な問題を内包している。論者は、そのような『更級日記』の文芸的特質を明らかにするために、その構造的・多層性の意味を究明し、さらに多元的視点から分析を試み、この作品の全体像に迫ろうとする。

本論文は、「第一部 『更級日記』の構造」、「第二部 『更級日記』の表現と方法」、「第三部 『更級日記』と『源氏物語』」の三部から成る。

「第一部 『更級日記』の構造」においては、『更級日記』研究史を概観しながらこの作品の多様な相貌を確認し、さらに『更級日記』の構造的・特質、家集的章段の作品内の位置づけと散文章段との関係の問題を考え、その構造的・多層性の意味を明らかにしている。「第一章 幻想と現実」では、幻滅の主題を読み取る従来の論の多くが幻滅に対して一面的に否定的な価値づけを行っていることを批判し、幻想の両面価値的性格を重視して、『更級日記』の構造的・特質を、幻想と現実とが相互に相対化し合う、合わせ鏡的構造として把握する。過去の生が作品内に定着させられる構造とその結果としての作品の構造を明らかにした注目すべき見解である。「第二章 家集的章段と散文的章段」では、構成上積極的な意味を持たないものと見られがちであった家集的章段について、章段相互の間に有機的関連があることを指摘し、さらに「第三章 東山の記の解釈をめぐる」において、典型的な家集的章段である東山の記を検討し、家集的章段と散文的章段との関係について論じている。「第四章 作品の構造的・多層性について」では、時系列にしたがって羅列された雑纂的記事群が悔恨の意識を基調とする述懐のみによって繋ぎとめられているという平面的な構造の作品ではなく、深層構造において章段が相互に連繋し様々な図柄が重ね合わされた多層的構造体として『更級日記』を把握する。『更級日記』の各部分の連関を解明した論者の見解は、従来の研究の欠落を補い、この作品を大きく進展させるものであると言える。

「第二部 『更級日記』の表現方法では、表現や記事内容上の特質、作品を支える方法意識について、様々な角度から分析する。「第一章 三筋の葵・四本の柱——数量的厳密さをめぐって」は、瑣末で具体的な数量表現が頻出することに着目し、作者の経験的実感を伝えようとするものとしてその表現を捉え、その背景に存在する失われた過去の時間を再構築しようとする作者の意識を探り出し、「第二章 子どものまなざし」では、そのような表現が、認識の枠組みが形成される以前の子どものまなざしによってこそ可能であったと説く。過去の時点における認識を呼び起こすことによって過去を再構築しようとする日記執筆の時点での方法意識を見る論者の見解は、新たな視点から『更級日記』の方法を解明したものであると言える。また「第三章 多元的視点について」は、二つの二項対立的図柄を分析することによって作品に内在する作者の視点の多元性を明らかにし、「第四章 方法としての夢」は、作中に頻出する夢の記事が、どのように作品全体の構成とかわり、方法的に利用されているかということを述べる。「第五章 不在の〈他者〉」は、身近な人々の姿が描かれず、そうした他者の不在によって生じた空白を埋めるかのように物語の作中人物や歌人達を作中に講じ入れるこの作品のあり方に、作者の孤独を見る。表現と方法の背景に存在する作者の意識を探りあてた論者の指摘は、『更級日記』研究を質的に大きく進展させるものである。「第六章 旅の記としての性格をめぐって」は、『更級日記』に頻出する紀行文的部分について、他の平安女流日記作品とも比較しながら検討し、「家の女」としての日常については徹底して沈黙を貫き、その空白を埋めるものとして一連の物語で記事を集中的に配列しているとする。従来の研究にあっては『更級日記』の文芸的世界に適切な位置づけがなされていなかった紀行文的部分の意義を明らかにしたこの論が、永く研究史に残るものであることは疑いを容れない。

「第三部 『更級日記』と『源氏物語』」は、『源氏物語』をはじめとして『更級日記』に影響を与えた先行諸作品との関係を具体的に考察し、作者の言語体験の内実とそれがこの作品の形成と方法にどのように関わったのかということを明らかにする。「第一章 日記と物語の関係をめぐって」においては、『蜻蛉日記』との比較によって孝標女の物語へのこだわりの内実を浮彫りにし、さらには『紫式部日記』の影響を指摘した上で、日記執筆時点でお物語にこだわる『更級日記』の読解のためには、孝標女の『源氏物語』理解についての緻密な検証が必要であるとする。「第二章 姉・継母と物語」は、作者を物語世界へいざなう媒介者としての役割を果たした姉と継母の存在の意味について考察し、「第三章 物語を読む女たち」は、『源氏物語』の末摘花と『更級日記』における作者の姿を比較することによって、物語の作中人物のイメージを利用しながら自嘲的に自画像を描く方法を『源氏物語』から学び取っていたとする。「第四章 『更級日記』と『源氏物語』」においては、『源氏物語』薄雲巻を背景とする表現が見られる記事が、薄雲巻を読む以前の体験を記したものであることを指摘し、複数の時間が重層的に塗り込められていることを明らかにする。『源氏物語』の影響の意味をさまざまな角度から考察し、この作品の方法と表現に深く関わるものであることを明らかにした論者の見解は、『更級日記』の文芸的世界がどのようにして形成されたのかという問題を解明する途を開いたものとして、高く評価すべきものである。

以上のように、本論文は、『更級日記』の文芸的世界の特質と諸相を、多角的、総合的に究明し、この作品の構造・表現、方法等について多くの新見を提示したものである。なお、平安女流日記としての『更級日記』の文芸史上の位置づけについては十分な検討がなされず、ひとつの課題として今後に残されることになろうが、そのことは本論文の内容の評価に大きくかわるものではない。

総じて、本論文は、従来の研究史を踏まえ、通行の諸説に疑義を呈しつつ、自らの創見を慎重に導入して、『更級日記』研究を新たな展望を開き、斯学の水準を高めたものであることは、疑いを容れないところである。

以上の理由によって、本論文の提出者は、博士（文学）の学位を授与されるに十分な資格を有するものと認められる。